



TK-P-011-042-08 「きのこ山」と呼ばれる野外での宴会 金山町・玉梨 大妻林道 1970年10月



TK-P-015-018-02 盆踊り 金山町・玉梨 1978年9月

唄ごえの生まれる場所 —次なる角田勝之助写真展へ向けて

大日方欣一（写真／映像研究、九州産業大学芸術学部教員）

あくまでも空想しているだけの段階、とはいえいつか実現すれば面白いのではないかと考えている展覧会のプランをいくつか持っていて、その一つが「唄ごえの生まれる場所—ベン・シャーンと角田勝之助を中心に」という写真展企画である。

画家として著名なベン・シャーンがとくに1930年代不況下のアメリカで写真家としても活動したことはよく知られている。ニューディール政策の一環でおこなわれたFSA（農業保全局）の写真プロジェクトに参加して彼がスナップした、南部の綿作地帯などの労働者や庶民の姿をつたえる写真群は、同じプロジェクトで活躍したドロシア・ラング、ウォーカー・エヴァンズらの写真と比較して、いい意味で緩いというか、人のポーズの取り方に端正さを求めず、くだけていたりポーっとしていたりするものがとても多い。茫然とくつろいでいるのだ、ベン・シャーンのカメラアイが捉える人びとは。私はかねがね、角田さんの写真に惹かれるのは、くつろぐ身体がそこにあるからではないかと思ってきた（プロ意識の過剰な写真家には撮れない身体のありようがゆたかに息づいている！）が、相通じる写真はなんだろう、と見回して真っ先に写真家ならざる写真家ベン・シャーンのそれが想起されてくるのだ。

絵面のまとめ方が似ているという意味のことを言いたいのではないし、フレーミングが似ているということでは、1950年代の6×6判による角田スナップは、西アフリカ、マリ共和国の都市バマコでずっと活動していた写真家



TK-P-016-056-03 刈払作業 金山町・玉梨 高森山登山道 撮影時期不明

TSUNODA Katsunosuke 1928年金山町玉梨生まれ。戦前より写真に関心を抱き、1951年より現在まで、自らの生まれ育った玉梨地区を中心とする金山町の「村」とそこに暮らすひとびとの姿を、写真や動画に収め続けてきた。1964年からは、写真の腕を見込まれ、地元建設会社に写真係として勤務した。新潟大学地域映像アーカイブセンターでは、2013年より角田映像の調査・デジタル化に着手し、その成果を「村の肖像」展シリーズとして公開してきた。

マリック・シディベの作品ととても近しかったりするのだが、私にはどうもベン・シャーンと角田勝之助の、おのずと他人をくつろがせるような力がともにとびぬけているように思えてならない。

くつろぐ身体から、ふと、唄ごえが生まれてくる—そうした場面を、二人の写真にたびたび見ることができるだろう。ベン・シャーンの場合には、道ばた（ロード・サイド）。よるべなく道ばたで立ち尽くし、あるいは語らっている人びとのあいだから唄らしきものが立ち上ってくるシーンをよく撮っている。一方、角田さんの写真では、人びとがどう宴の場から、唄が始まっていく。写真は沈黙の、無音のメディアといわなければならないのだろうが、両者のスナップショットには、唄ごえがどこから湧きだすのか、どこからやって来るのかが、写し捉えられているのではないだろうか。

「唄ごえの生まれる場所」展では、二人の写真それぞれをしっかり見せた後、それに連なる古今東西の様々な「唄の誕生」に触れる写真をとり揃えたい。たとえば、ウジェーヌ・アジェが1900年前後のパリの路地で撮った、手回しオルガン弾きの老人と唄う少女の写真はどうしたって欠かすことのできない一枚であるはず



左上から TK-P-014-066-04 こどもたちの集まり 金山町・玉梨 撮影時期不明／TK-P-013-038-01 冬の玄関 金山町・玉梨 1974年3月／TK-P-013-042-01 熊の解体 金山町・玉梨 1974年5月／TK-P-013-021-04 富三郎宅にてきのこ山 金山町・玉梨 1973年11月

だ。ニューヨークに暮らすアフリカ系の人びとの暮らしを描くロイ・デカラヴァの写真集「The Sweet Flypaper of Life」もぜひ交えてみたい。また、角田さんが追いかけた金山のアマチュアバンド「すみれ楽団」の写真をあつめた展示室の続きに、浅井慎平、草森紳一、鶴本正三による伝

説の「ビートルズ・レポート」を再構成した部屋をつくることも検討に値するのではないだろうか。こうして書いてみると、構想が次々に湧き起こってくるが、それも角田勝之助とベン・シャーンの写真の大いなる魅力に動かされてのことなのである。 ■